Sprachprobe の諸問題

塩　谷　　饒

1

ある言語の基本的な特徴を示そうという場合は，音韻・綴字・語形・語構成・語の機能・文の構造・語彙などの全般にわたって代表的な例を集める必要があることは言うまでもないが，提示の目的によってはその何れかに重點が置かれることがあり，また何れかを省くことも可能である。

たとえば，短期間に習得することをもくろんだ大學用のドイツ文法においては，現在の語法にあらわれた語形変化——それも特に動詞を中心として——の習熟が文例を通じて行なわれるようにまず心掛けるべきであり，文の構造については動詞の位置との關連において言及されるならば，すでに學生が英文法で習得した術語を繰返して説明するにはおよばない。従って語形の變化を示さず，辭書によってその意味が求められる副詞や間投詞は必ずしも項目を設けて説く必要がない場合がある。一方英文法において平行現象が見出せないいわゆる〝冠飾句〟などは一應とりあげた上，さらにこれが文語的な表現であることを一言しておくべきであろう。現在の學問的な見解から言ってとっくに克服された無用な分類や，かって存在したが現在普通の文語にも見出されない變化形などをわざわざ掲げることは，學習者に無用の負擔を與えるわけであるから絶對に愼しまなければならない。前者の例としては〝發音〟の項にもおける〝重母音〟と〝複母音〟の別があげられ，後者の例には〝形容詞2格の强語尾(-es)＋弱變化男性名詞（-en)〟をあげれば十分である。

母音を表わす文字が重なった場合に——Saat, Boot, Tee——これを〝重母音〟と見出しをつけて分類することが10冊の文法書のうち 6，7 冊まで見られるが，これは音聲學的には何ら根據がないのであって，おそらく文字と音聲の別に關心の薄かった19世紀の Schulgrammatik の名殘りであろう。すなわち，これらの音價は〔a:〕〔o:〕〔e:〕であるから，それぞれ單獨の文字 a, o,

e（あるいはそれに h のついた場合を加えて）で長い母音を表わす例にまとめておいてよいのであり，もしも文によって説明がしたければ，aa, oo, ee は常に長く発音されると言えばよいのである。しばしば ie〔i:〕の例も〝重母音〟という項目にあがっているが，誤解もはなはだしいと言わなければならない。重母音とは音聲学上の術語としてはドイツ語の Diphthong に相当するものであって，綴り au, ei, eu で表わされる音が標準独語の典型的な例である。つまり多くの文法書で〝複母音〟と呼ぶところのものである。この Diphthong を説明して〝重母音〟と言おうが〝複母音〟と言おうがそれは表現の問題だからどちらでもよい。しかし兩者を分けて扱うことは——たとえそれが日本獨文學會の用語例にのっているにせよ——はなはだ不合理と言わなければならない。

次に形容詞の變化の例であるが，實に多くの文法書は强変化の男性2格の語尾にわざわざ注をほどこして〝名詞が弱變化のときは强語尾 -es を示す〟旨をつけ加え gutes Knaben となると説明している。だがこういう例が文中において實際において使われているのを見届けた上での發言であろうか。なるほど Curme の文法書（1922[2] S.129）には强変化の形容詞として guter—guten (es),—gutem—guten という表があるが，それは弱變化の名詞に先立つときに强語尾となるということを示したのではなく，實はこういう語尾が reines Herzens といった固定した表現のほかには -en で代られたこと，指示形容詞としての dieser, welcher などの2格に -es が保たれていることを説いているに過ぎない。Jude はその文法（1961[10], S.56）で變化表の中に gutes(guten) Weines, gutes (guten) Feldes と書いているが，これに注をつけて ,,Im Genitiv des Sing. des männlichen und sächlichen Geschlechtes setzt man meist-en: Die Lagerung guten, alten Weines erfordert besondere Sorgfalt. Der Verstand edlen Obstes.“ と述べて居り，特に弱變化名詞の例を引用していない。なぜその必要がないかと言えば，弱變化男性名詞はどれも具體的な名詞であって，その2格が規定語を伴わないで文中に現われることが今ではないからである。Hofstaetter の Deutsche Sprachlehre (1960) に

reines Menschen Wollen という例があったが2格の位置からして，もとよりこれは現代語の語法ではない。(注1) されば共時論な立場から現代ドイツ語を記述した Glinz, Erben, Schulz-Griesbach などの文書はみな -es という語尾を省いているのであって，われわれも現代語の基本的な文法の型を示そうとする限り，これは無用のものと言わざるを得ないのである。

2

ある言語の習得を目的とするのでなく，すでに既知のものと比べながら，同系の諸言語との親近關係を示そうとする場合には，文法の項目の一々にわたって點檢する必要はなく，きわめて限られた資料ですませることが多い。多くのページを費した冗言よりも直觀的な地圖に特別な意義を認めるという Frings(注2) は ,,treu wie er ist" に相當する語の對應を言語地圖に表わすことによって古代ゲルマン諸語の特質を示し，その分類を明かにしようとした。どの語を選定するかに非常な配慮があったと思われるが，このようなことは同じ原文にもとずく飜譯文を用いれば自ら語と語との對比ができ，また構文上の特色もある程度うかがえる利點がある。たとえば Stroh は Handbuch der Germanischen Philologie の中で，現在のゲルマン諸語の分布について簡潔に述べた後，主の祈りの一節をひいてその親近關係を明かに示そうと試みている。彼はギリシァ語のほかにラテン語およびゴート語をも對比させた上，現在一つの國語として文語を持つものを扱っている。

そのうち現在のゲルマン語に關するものだけを引用すれば次の通りである。

Schwedisch: Fader vår, som är i himmelen. Helgat varde ditt namn.

Dänisch: Vor Fader, du som er i Himlene. Helliget vorde dit Navn.

Norwegisch: Fader var, du som er i himmelen. dat namnet ditt helgast.

Isländisch: Faðir vor, θū sem ert i himnunum. Helgist θitt nafn.

Färingisch: Fačir vár, tú sum ert á himni. Heilagt verči navn titt.

Englisch: Our Father which art in heaven. Hallowed be thy name.

Niederländisch: Onze Vader, die in de hemelen zijt. Uw naam worde geheligd.

Nhd.: Unser Vater in dem Himmel. Dein Name werde geheiligt.

Germanistik が發達分化した結果，ゲルマン語のすべてにわたって通暁した上で独自の研究をあげることがドイツ人學者でも難しくなったと言われる(注3)現在，このようにまず親近關係を表示することは意義のあることである。しかもここに普通では顧みられない Färingisch（アイスランドとスコットランドの間にある群島の住民 —Fäorer— 約3萬の言語。1948年以來デンマークから自治をかちとって公用語となった。)の文例が擧がっていることはきわめてその感を深くする。そこでこの表を通覧するなら，英獨2語の理解をもつに過ぎないものにも，ゲルマン諸語の基本的な一致が容易にうかがわれるであろう。そしてスウェーデン語以下の北歐5語が互いに特に近いこと，またドイツ語とオランダ語がきわめて近いことも簡單に見てとれる。さらに少し注意を拂えば，アイスランド語は語尾の母音，子音と特有な齒音のゆえに，また助動詞を用いない受動の要求話法のゆえにゲルマン語の古い段階を示していることが分り，Färingisch はまさにこれとスカンディナヴィア諸語との間に立つものであることに氣付く。しかしこの表は現代ゲルマン諸語の中におけるドイツ語の位置を必ずしも正しく示しているとは言えないのである。なるほど北歐諸語はあますところなく引用されているが，公用語のみをあげたためにオランダ，北ドイツ，デンマークの一部にわたって語られる獨立のゲルマン語，すなわちフリジア語 (Friesisch)，ベルギーの北半分において通用するフラマン語 (Flämisch) などが顧みられていないから，近頃問題となっている西部ゲルマン語派の現狀が明かにされていない。

これらの諸語とドイツ語・オランダ語・英語を實際に比較した經驗をもって

こそ，西部ゲルマン語の問題にも十分の理解を持ちうるのであって，われわれは適当な例文を近代語譯の福音書に見出すことができる。（ヨハネ傳3の16）

Deutsch: Also hat Gott die Welt geliebet, daß er seinen eingebornen Sohn gab, auf daß alle, die an ihn glauben, nicht verloren werden, sondern das ewige Leben haben.

Niederländisch: Want alzoo lief heeft God de wereld gehad, dat Hij Zijnen eeniggeboren' Zoon gegeven heeft, opdat een iegelijk, die in Hem gelooft, niet verderve, maar het eeuwige leven hebbe.

Flämisch: Want alzoo heeft God de wereld bemind, dat Hij zijn eenigeboren Zoon heeft gegeven, opdat al wie in Hem gelooft niet verga, maar het eeuwige leven hebbe.

Friesisch: Hwent God hat de wrâld sa ljeave, det hy syn ienichst berne Soan jown hat, fordet al hwa 't yn him leaut net fordjerre, mar it ivige libben habbe.

Englisch: For God so loved the world, that he gave his only begotten Son, that whosoever believeth in him should not perish, but have everlasting life.

これらの例から察せられることは次の通りである。

1. オランダ語は文頭の want（意味はドイツ語の denn に當る）と maar を除けばそのまま Nhd. に對應する表現を持つ。たとえば lief heeft…gehad =lieb hat…gehabt ; opdat=auf daß ; iegelijk=jeglich; verderve= verderbe のごとく。want も現在のドイツ語には見出されないが，Mhd. に存在した語である。

2. フラマン語は語彙の不一致を除けば，オランダ語と同種の型を示し，共にFränkischに属する言語と説明されて直ちに了解できる。上例の特殊な語彙も普通のオランダ散文に見出されるところである。なお bemind（beminnen ドイツ語 minnen）をのぞけばそのまま ドイツ 語にも対応している。たとえば verga=vergehe のごとく。

3. フリジア語は一方においてはオランダ・フラマン語に非常に近いものを示しているが，ge-の消失（jown＝gegeben, leaut＝glaubt）や母音のわれ（Soan, leaut）などの點において Angelsächsisch との共通點がうかがわれる。(注4)

さらに母音間の b の弱まり（有聲摩擦唇音化→母音化あるいは消失：jown＜gegeben, leaut＜glaubt, fordjerre＜verderbe）は低地・中部ドイツ方言との平行現象であることも見逃せない。

なおドイツ語の例は Luther 譯にもとづくものであり，英語も欽定譯であるから，これらの譯によって現代の共通語そのものの對比にはならないが，ともに近代語の形成に与った點の多いことを考えるなら，そこにいわゆる西部ゲルマン語の基本的な特徴がある程度察知できることは誰しも認めるところであろう。

3

ドイツ語史上で區分されるある時期の言語の特徴を示すためには，例として使われる文献が語法の変遷を反映するように編集しなければならないが，標準的な文語が確立されず，代表的な文献がきわめて言語の地域差を示し，その上文章のジャンルがはなはだ豊富な Frühneuhochdeutsch は，文學史上第一次黄金期と稱えられる宮庭文學に中心を持つ Mittelhochdeutsch の場合とは比較にならぬほどの難しさがある。この時期の言語の Übung のために編集された „Frühneuhochdeutsches Lesebuch (Götze-Volz 1958)“ にはその點に考慮を拂った跡が十分うかがわれる。これらの著作は Frühneuhochdeutsch の研究上どのような価値を持つかをまず検討した上，例文にどの程度言語の特徴がうかがわれるものか，そこにあげられた Luther を例として考察して見よう。

そもそも Götze が1925年に刊行した Frühneuhochdeutsches Lesebuch はこの複雑なドイツ語史の一時期における言語の様相を具體的に示すための Sprachprobe を集めた唯一の入門書であったが，Volz の補訂した第4版（19

58年）は最近の Frühneuhochdeutsch 研究の成果をとりていることが基礎的な文献の列擧と各事項の解説に認められる。

ここには1378年に發せられた皇帝 Karl 4 世の詔勅を筆頭に，1400年代の各種の印刷文，Steinhöwel, Sebastian Brant, Hutten, Johannes von Staupitz Kursachsen 官廳語，Luther, Hans Sachs, Johann Fischart などを經1616年に發表した Kepler の幾何用語の説明に至るまで 38 項目にわたって年代的に配列されている。B 5 版で 172 ページであるから參照携帶に便である。その種類について見ると，印刷文も手稿もともに顧みられて居り，史詩，敍事詩，風刺詩，格言，寓詩，童話，傳説，對話，聖書の飜譯，信仰書，宗教論爭文，古典の飜譯，旅行記，科學文，詔勅，公文書，法律，戰爭の報告，書簡等實にさまざまである。しかも編者はこれらをただ時代順にならべたと言うに止らず實は Mhd. に近い段階にとどまる西南の地域と，近代の共通文語の基礎となった東中部方言(das Ostmitteldeutsche)をとくに顧みて居り，16世紀の文献をもっとも多くとりあげている。研究者を利するもっとも大きな點は Luther, Sachs, Brant などをのぞくと容易に文献全體を入手して飜讀できないものがふんだんに引用されていることである。われわれが Luther, Sachs などを研究するときに，入手できる Text によってその言語を比較して特徴を把握することも必要であるが，それらが Frühneuhochdeutsch 全體の中でどういう位置を占めているのかを具體的に知るためには，このように配慮された Lesebuch が非常に頼りになる。

たとえば Luther のように廣範囲にわたる文書の活動を行ったものに關しては直接に對比すべき幾種かの材料が見出される。(注5) すなわち Luther が自らその言語形式を利用する一方，その表現の固さと語彙の不適を打破したという Kursachsen の官廳語については1521, 25, 32, 35年に發表されたものが收錄されているから，Luther 自身の言語と比べて見ることができる。そして日本では官廳語の資料を驅使することが難しいだけに本書の利用價値はきわめて大きい。Luther が强い關心を示して自ら書直したイソップ物語は，1530年にとりかかった〝ねずみと蛙〟が引用されているが，彼の Vorlage である Stein-

höwel の同じ題材（1476～1480年の作 Ulm）が對比され，さらにこのテーマで韻文を作った Hans Sachs（1558年 Nürnberg）の例も對比されている。これによって同じ素材を扱った三者のねらいを究めることも無論できるが，言語の比較もある程度できる。全體として Mhd. に近い段階を示す西南地方の出である上に時代もやや古い Steinhöwel には Mhd. の古い母音が未だに保たれて居り——wy, gelyche (=Weihe, gleich) ; lüt, bütt, (=Leute, Beute), ouch (=auch) fuoß (=Fuß)——, Luther と同時代の Sachs にはそれが見られないが，この一つの詩の中にも thamb=Getöse のように Oberdeutsch 特有の語彙が見出される。聖書飜譯の問題について言えば，1475年（Augsburg）と1483年（Nürnberg）に印刷された聖書のうちからマタイ傳の6章全體が收錄されているので，Luther 譯の原本飜刻を入手したものにとっては，語法の推移と飜譯技術の比較を試みることができるであろう。この點についてとりわけ興味があるのは，Luther の聖書が原文に忠實でないという批難のもとに自らの飜譯をもってこれを駆逐しようとした Hieronymus Emser（1478-1527）も一つの項目として扱われ新約聖書中のもっとも有名な箇所であるロマ書第3章全體が Luther 譯と比較されていることである。Emser 譯を全體にわたって簡單に手許において利用できない現在のわれわれには，はなはだありがたい。Luther は實はこの譯をもって，（Emser の抱負にもかかわらず）自己の譯の改竄であり盗作にひとしいときめつけているが，その相似は3章全體の比較をまたずして察せられるところである。

Emser 1527	Luther 1522
⑤ Ists aber alßo, das vnser vngerechtigkeit, Gottes gerechtickeit preysset, was wollen wir sagen? Ist den Got auch vnrecht, das er druber zornet?	Ists aber also, das vnser vngerechtickeyt, gotis gerechtickeyt preysset, was wollen wyr sagen? Ist denn got auch vngerecht, das er druber zurnet
⑥ (Ich rede also auf menschenweyse) Das sey fene, dan wie kondt Gott sust die welt richten)?	(Ich rede also auff menschen weyse) Das sey ferne, Wie kund den got die welt richten ?

両者の出身を示す綴字の相違——ここに引用した箇所だけではそれもあまりうかがえない——，不變化詞の用い方などを除けば，ほとんど變るところがない。allein durch den Glauben の飜譯のゆえに攻擊された Luther の版に問題の ,,alleyn" がなかったら，Emser 譯は Luther 聖書そのものの何版か，あるいは彼の校閲を經ない複刻と認められてしまうかも知れない。

さて Luther 文献そのものについて見ると，上に述べたイソップの飜案，ロマ書第3章のほかに詩篇第34篇飜譯の手稿（1524）と最終決定版（1545），1530に發表された論爭文 ,,Widerruf vom Fegefeuer" （の一部）の手稿と最初の印刷，1532年7月29日に Sachsen 侯 Friedrich にあてた書簡が收められているこれらの例は，莫大な量を示す Luther の書きのこした（また印刷させた）文献の中にあって九牛の一毛に過ぎないと言えるだろうが，各種の文にあらわれた多彩なスタイルを瞥見することはできようし，しばしば問題とされる手稿と印刷の關係について吟味する機会が得られる。すなわち，若き Luther が草稿を勝手に変えて印刷するといったなげきは，彼の文筆活動の絶頂に達した1530年頃にはおそらく聞かれなくなったと思われる。それは ,,Widerruf vom Fegefeuer" の草稿と印刷文の對比から察せられるのである。それによれば印刷文は句讀を正し，手稿における Umlaut 記号の缺を補っており全體として讀み易くなっていると言えよう。

彼の言語について言えば，これだけの材料では1517～1545年にわたる間に見せた發展の跡は浮彫りにさるべくもないが，その特徴として認められる點に關していくつかの例が見出される。

1. 綴字・音韻

a) 母音の表記は早い時代の印刷（1522年の聖書）や手稿（1524，30，32）ではおおむね Umlaut 記号を缺き，i を y で表わすことが非常に多い。また vnd, vngluck のように語頭の u は常に v で表わされる。

b) 子音の特徴である重ねはもっぱら ff にうかがうことができる。auff, rieff, halff など。

わたりの b，p を暗示した綴りが多い。warumb, kompt, allesampt.

有聲音間における t の lenis, 逆に d の無聲化——兩者はともに〔d̥〕と推定される——を示す綴りがある。Andlitz＝Antlitz, beschneittung＝Beschneidung

2. 語　　形

a) 名詞的品詞について見ると1520年代の印刷・手稿では不定冠詞類の變化形に不統一があり，女性形の -e の脱落（meyn seele）があるかと思えば，男性形 -er による擴張形（yhrer mund）などが見られる。

名詞そのものの變化では弱語尾形において Mhd. の段階に止まるものがある。zubrochens hertz**en**＝zerbrochnes Herzens; von der sonn**en** hitze

b) 動詞では弱變化の過去形 -te ははなはだ多くの場合を消失し，前後の關係からのみ時稱を確定させる。verstellet, antwortet, errettet, sucht のように。

同様に könnte, sollte なども kund, solt となる。

强變化動詞はしばしば Mhd. の重母音を保っている。treib＝trieb; bleybe＝bliebe; fleuget＝fliegt, zeucht＝zieht,

sein の過去分詞は gewesst という形を示す。

3. 文章論上の問題

現代の文で確立されている定動詞の位置は必ずしも副文で後置されないことが多く，一方においては今日大はばにせばめられた二格の用法がなお多く見出される。それによって Luther の文が口語に近く，歴史的には一段階古いことも示す例となりうる。

a) 定動詞の例: wilchen（＝welchen）got **hat** furgestellet zu eynem gnade stuel……

syntemal es **ist** eyn Got der da rechtfertiget die beschneyttung aus dem glawben……

b) 2格支配の動詞，形容詞として部分に關するものが多く見出される: Was **haben** den nu die Juden **vorteyls** —vnnd **mangeln des preyses.** — yhrer mund ist **voll fluchens.**

また2格名詞の述語的用法もある：**vnd rechtfertige den, der da ist des glawbens** an Jhesu.

以上の例からドイツ語史の記述中において Luther の言語の特徴としてあげられる程度の特徴が大半は示されているということが言える。また一つ一つの例は特別に Luther を研究するものでなくても，ドイツ語の歴史的研究に向うものには何れも興味ある考察の對象となるであろう。

しかし上例だけでは語形，文章論の多くの特色が明かにされないし，語構成や語彙の様相は究められない。従ってそれらは Luther の言語に接近するきっかけを作るのに役立つが，同じ地域（Ostmitteldeutsch），同じ時代の中でとくに彼の言語の特異な點を明かにしているとは言えないのである。

4

できるだけ多くの種類の文を示す Götze とは違った觀點からFrühneuhochdeutsch入門の Text を編集したのは G. Eis である。彼は1949年に,, Frühneuhochdeutsche Bibelübersetzungen" を刊行したが，それは1400年から1600年の間に企てられた聖書の飜譯約30種の中から適當と思われる箇所を選んでB 5 版 139 ページの一本としたものである。内容的には Götze の Lesebuch ほど變化に富まないが，時代の推移にともなう語法の變化を大まかに吟味できるほかに，同じ原典にもとずく文體の對比や飜譯技術上の比較へと誘う點に特色がある。筆寫本から印刷本へと時代的に及んでおり，もっぱら高地ドイツ語地域ではあるが方言の差異もみとめられる。このように多くの——時代と地域を異にする——聖書の例を示されたことは，Luther 譯をのぞけばほとんどそのままの形で入手できない今日のわれわれにとって貴重な資料を呈供していると言えよう。そこに添えられた解説によってそれらの出典が明記されているから，これらの Text そのものの研究に志そうとするなら，現地においてこれに接しうる希望も与えられている。そこに引用された例が全部同じ箇所の對比ではないが，Luther との比較ならわれわれにも可能である。ある程度の對比は Eis 自身が行なって居り，それには Luther を省いたものと，含めたもの

とがある。たとえば前者の例としてルカ傳11章1–20節を用いた7種の對比が擧げられる。その一番古い譯は14世紀から15世紀の轉期にボヘミアで行なわれたと考えられる ,,Codex Teplensis" で，次いで15世紀前半に成立した ,,Freiberger Handschrift" から，印刷されたものへと及び，その最初を承っていゆる Mentel-Bibel が置かれている。これは1466年に Straßburg で印刷されたものであるが，言語さらに古い段階を示している。續いてその Nachdruck である Eggenstein (1470年頃)，Pflanzmann (1475年頃)，Zainer (1475–76年)，Sensenschmidt (1476–78年頃) の諸譯が收められている。それらを通覽すれば，はじめの手稿二つはきわめて近く，印刷本に比べて一層 Mhd. の名殘りを保っていることが察せられる。すなわち，音韻・綴字に關していえば slange (=Schlange), beslossen (=beschlossen); vzwerfent (=auswerfend), vfgetan(=aufgetan) などの例に，また文章論上の問題から見れば，完了態の機能を示す ge- の用法 (gesten=ge+stehen)，sein+現在分詞による進行形 (waz betent, waz vzwerfent=war betend, war auswerfend) などの例にうかがわれる。印刷本は Mentel がやや古い様相を示しているが，進行形の例の一つを除いて上にのべた點を拂拭している。しかもそれら全體を通じて Luther に比べればなお Mhd. の特色が多く，音韻・語形にとどまらず不變化詞の用法 (so=wenn, ob=wenn, wand=denn) や語彙 (eischen=suchen, beschlossen = zugeschlossen) にも及んでいる。文章論上の點で Mhd. に近いとものの中には，これらの聖書のもととなったラテン語譯の影響と判ぜられるものがある。たとえば七つの聖書を通じて見られる ,,Und Jesus war auswerfend den Teufel." は ,,et erat eiciens daemonium" の直譯であり，二つの筆寫本と Zainer, Sensenschmidt にある ,,Es ward getan, da er war an einer Stadt betend." に當る飜譯は Vulgata にある ,,Et factum est cum esset in loco quodam orans." の分詞を明かに殘そうとしたものである。また筆寫本をはじめ Mentel, Eggestein, Pflanzmann の5飜譯に存在する ,,nichten wollest mir sein leidig" という句は ,,Noli mihi molestus esse" にならったものであり，動詞だけ wollen を用いて

分析的な表現を示しているに過ぎない。さらに Zainer, Sensenschmidt 以外のものに見られる „Ihr sagt michauswerfen die Teufel in Beelzebub" は〝不定詞を伴う4格〟の1例ではあるが，ラテン語譯を見ればやはりその影響を否定することができない，„quia dicitis in Beelzebub eicio daemonia." このルカ傳の箇所は Luther 譯が擧げられていないが，Weimar 版中に收められた Septemberbibel と見ると，そこにはラテン語譯の影響はまったく見られない。

以上ここにあげた七つの聖書の中で，とくに方言の特色が強いのは Sensenschmidt である。1476–78年に Nürnberg で刷られたと推定されているが，„Schweizerbibel" と稱えられているだけあって，Nhd. の二重母音が單母音となっている：vff(=auf), huß(=Haus), lych(=leihe), tuffel(=Toufel)

さて Luther 自身の譯は創世記6章，列王記上4章，詩篇1篇，テトス書1章，ペテロ後書3章，ヨハネ默示錄第5章の數箇所において他の譯と對比されている。そもそも Eis は Luther 以前のものだけでなく，同時代のカトリック學者による飜譯をも3種類あげて，語法・文體・飜譯の技術を比較する機會を作っている。すなわち Emser (1477?–1527), Dietenberger (1475–1538), Eck (1486–1543) 等何れも Luther に對立し，その刺戟を受け，さらに Luther 譯の獨斷を排して，これを驅逐しようという明瞭な意図によって刊行した人たちである。Emser については Götze の Lesebuch の項で言及したが，本書では Dietenberger とペテロ後書で，Eck と創世記6章，列王記上，詩篇1篇において直接に Luther 譯と比較することができる。前者は材料が少ないので，外來の語彙が Luther に比してやや多く使われている點が察せられる程度であるが，Eck の場合には上部ドイツ方言を示す例が充滿している。重母音の綴りに見る ai (ain, gaist, braite, flaisch, zwaintzig=Zwanzig), ge- におけ弱音 e の消失 (gmacht, gschrai=Geschrei, gsatz=Gesetz; gschlagen, gwaltig), 名詞語尾 -e の脱落 (stim=Stimme, erd=Erde, speiß=Speise), 破擦音化を推定させる kh (Khommen, Khinder), 動詞複數3人稱語尾 -d (warend, sprachend, seind, sprechend), Mhd.

gan (Nhd. gehen) に對する gan などはそれである。tabernackel(=Zelt), pestilenz(=Spötter) をはじめとする外來語の使い方も Luther に比べて特異とするところであろう。

Luther の飜譯は何といっても Frühneuhochdeutsch の聖書文献の中心を占めるものであるから，Eis もその意義を認めた上，本の10パーセントのページ數をさいている。それは初版本とか最後の譯とか，ある時期の中から集約的に示したものでもなくまたある一つの箇所を選んで1522年から46年までにわたって丹念に加筆補訂した苦心のあと（從って言語發展のあと）を明かにしようと試みたものでもない。旧約・新約の傳記・史書・詩・書簡・默示錄等にあらわれた各種のスタイルをいろいろの時期に行われた飜譯・複刻によって示そうとしたと考えられるのである。だからそこから Luther の言語の特色を抽出することは，Götze の Lesebuch で見られた程度の大まかな點をあげる結果となろう。

さて Luther の言語そのものを研究しようとするものには，そこに擧げられた1522年の初版本（Septemberbibel：テトス書1章）と23年（創世記6章），24年（エステル書第2章，詩篇第1篇，70篇）の譯にどれほどの差があるかということが問題となるが，綴字・音韻・語形・構文等言語の外側の構造に關しては特記すべき差は認められない。23-24年版には思い出したように Umlaut の表記が現われることがあるが，これなどは各版の比較量を増すことによって變化の程度が正確に分るであろう。もっとも大體において一致しているのは，刊行の年が續いているためと Wittenberg の同じ書肆（Melchior Lothar）のもとで發行されたからである。

いささか變ったものとしては Druck Jhesus と呼ばれる版から引かれたペテロ後書で，それは Luther が權威を認めた Melchior Lothar または Hans Luft 以外の書肆で複刻されたものをうかがい知る例として役立っている。大體において初版本を文字通り複刻したものではあるが，動詞2人稱複數語尾はほとんどすべての場合において -ent となっている點が目立つ。

Wendent, reychent, flyehent=wendet, reicht, flieht

また綴字には少なからぬ特色があり，Luther の手稿や Lothar, Luft による印刷本に見られない a の Umlaut (vergäncklich=vergänglich, här=her, zärtlich), Mhd. uoに對する ů (zů, můß, můt, sůn=Sohn), 重母音 eu に對する eü (äü) の表記 (verleügnen, greüwlich=greulich, eüch) をはじめ，重母音 au, ei を時に單母音で表わしていること (uss, uff, tusent, ynführen=aus, auf, tausent, einführen),; u をしばしば ü で表わすこと (lüst, thüt=tut, erkantnüss= erkanntnuss = Erkenntnis) はたしかに上部ドイツ方言の音韻にもとずくものと判斷させる。

本來の Luther 聖書に例を限って見ても，Götze の Lesebuch 同様とくに Luther を專門としなくても，ドイツ語の歴史的考察を行なうものにいくつかの興味ある材料を提供していることを見逃せない。たとえば語形に關しては2格の强語尾 (vmb schendlich**s** gewinns willen), 規定語に合わせた形容詞の强語尾 (zu all**em** gutt**em** werck), などをあげることができるが，文章論の問題について見れば精神の狀態を表わす2格 (da der koenig **guts muts** war vom wein), 部分2格 (so wird sich **verachtens** vnd **zorns gnug** heben. vnd will **deynes rhumes mehr** machen), 2格を支配する動詞，形容詞 (Ich will alleyn **deyner gerechtickeyt dencken** nicht **schendlichs gewyns** gyrig) 等廣範囲にわたる Genitiv の用法が目立つ。そういう意味での材料ならば Luther 譯ならずとも，この本に收録された Text の一つ一つが何らかの問題を提供していると言えるであろう。

しかし原典を同じくする Text を適当に排列したものであるから，その Zeitraum の全體を通じて目立つ語法，またはその變遷もある程度うかがえるのではなかろうか。然り，それは現在分詞の用法，否定の語法がよく示すところである。前者については，その sein との結合の形式をルカ傳11章1-20節による7つの聖書の対比で督見したが，なお次のような例をあげることができる。

Wann er **was habent** vil besitzungen (マルコ傳10の22: Mentelbibel 1466 年)(注6)

Wan du **bist** gros vnnd **tuend** wunderliche ding (詩篇86の10: Psalter Hain 1499年)

これらにまさって多く見出されるのは，言説に關係する動詞の現在分詞の用法である。それは日本語では〝～して言った〟という表現に当るものであり，現在のドイツ語では „～und sagte" と言うところである。

Wan zufuerten in zu deme gerichte/**sagende** (使徒行傳18の12-13節: Codex Teplensis 14-15世紀)

Sy wunderten sich mer **sagent** zů in selber. Vnd wer mag werden behalten. (マルコ傳10の26: Mentel 1466年) vnd hiess das kind ychaboth **sagent** Die glori ist hingenomen von israhel (サムエル記上4の21: Anton Sorg 1477年)

Vn aggeus der bot des herren hat gesaget vō den botte des herren von de volck **sprechend** Ich bin mit euch spricht der herr. (ハガイ書1の13: Anton Koburger 1483年)

これらの分詞は sein との結合を含めて，ラテン語譯の忠實ななぞりと言えるものであって，Luther がようやく完全に脱却したところである。興味ある問題は Luther よりもラテン語譯を重視したカトリックの學者 Emser, Eck, Dietenberger らがふんだんに現れる古典語の分詞をどのように處理したかと言うことであるが，彼らも Luther 譯にまさるものをもって大衆に訴えようと努力しただけに，この點に關してそのまま Latinismus を示すようなことはしなかったようである。少くとも Eis の Lesebuch にあげられた例からはそれをうかがうことはできない。

さて否定の語法は古い Text ほどいとも明瞭に Mhd. の段階に近いことを示し，歴史的な變遷をたどるのに好都合な材料を提供している。

すなわち，諸種の筆寫本には動詞に伴う en が見られるが，それはもはや單獨で用いられることはなく，かならず他の否定詞と結びついている。

nit ensweig (=nicht schwieg), nit **en**wainz (=nicht weine)—Codox Teplensis, 14～15世紀

also **inmogent** (in は en の中部方言における形; +mögen) ir keyne frocht brengen, yn myr nit inblibet(=nicht bliebet). Mitteldeutsche Evangelienharmonie, 1411年。

その後の印刷本では次第にこのような en は消え，Luther にはもはやまったく見出されない。しかるに現在の **nicht** は彼においても未だ完全な副詞とはなりきらず，未だ代名詞（現在の nichts）の機能を保っている。

一方 nicht に副詞的な用法が加わったのはやはり Mhd. の後期からであるが，本書においては Luther 以前の諸譯で nicht の 3 格 nichtenがそのまま副詞的用法を示している。それは筆寫本をはじめ15世紀後半の印刷本にも散見するが Luther にはもはや見られなくなった用法である。次に本書中の例で對比して見よう。

Eggestein 1470	Luther 1524
SElig ist d′ man d′ **nichten** gieng in de rat der vnmilten vnd **nichten** stund in den weg d′ sund′ vnd **nichten** saß auf de stůle der verwůstung.	Wol dem der **nicht** wandelt ym rad der gottlosen/**noch** tritt auf den weg der sunder/noch sitzt da die spotter sitzen. （詩篇 1 の 1）

Eisが巻末に ,,Äusserungen der Übersetzer" と題して，聖Hieronymus, Luther, Eckの 聖書飜譯について自ら述べたところを收録したことは，一方においては Frühneuhochdeutsch の Übung の文献をつけ加えた結果になるとともに，飜譯者の態度・方針を要領よく示したもので，相互の比較の場合に一層理解を深めることになろう。

ここに引いたラテン語譯 Vulgata の飜譯者聖 Hieronymus の言は Günther Zainer 出版（1475–76）の ドイツ 語譯聖書ヨブ記の序に附けられたものである。Luther の言は，彼の飜譯が語られる場合にかならずと言ってよいくらいひきあいに出される Sendbrief vom Dolmetschen (1530)の抜粋である。ここでわれわれの興味をもっともひくのは1537年に發表されたカトリックの學者 Eck の文である。Luther はまず原語を究めた上，それからドイツ語として適

切な表現を求めようとした——この點において今日の飜譯家と軌を一にしている——のに，Eck は〝ヘブル語，ギリシァ語，カルデア語でどう一致するのか，教法師達がどう理解し解釋するのか自分は問題としていない。われわれはラテン教會に留るのであって，そこにこそ聖靈によって正しい Text が保たれて來ている〟と述べている。そして自分が飜譯の筆をとったのはひとえに〝改竄された聖書（Luther 譯をさす）が横行しているからだ〟と動機を明かにしている。もっとも力を入れたのは旧約であり，新約については Emser の譯を高く評價していて，ただ〝彼が Hochdeutsch に普通でない語を使ったところ，また神聖なるキリスト教會が全然關知しないのに一人の無頼漢が Erasmus の飜譯にもとずいて勝手につけ加えたところ（筆者注 Luther は Erasmus の校訂したギリシア語のテキストよって飜譯した。），を訂正削除した。〟と述べている。ここに高く買われた Emser は Götze の Lesebuch で見たように Luther 譯と大同小異のものを刊行しており，それゆえにこそ Luther が Sendbrief の中で口をきわめて攻擊しているが，當の Emser は Luther こそ Text に忠實でない點を時々指摘して居る。實は本書中に引用された Emser 譯には彼が注をほどこし，Luther 譯と違うところをあげつらい，いかに相手が正しくない譯をしているか激越な調子で記している箇所がいくつかある。彼はしばしば〝Luther はギリシァ語にもラテン語にもないことを附け加えた，飜譯を省いた，改竄した〟などと述べているが，その箇所をギリシァ語またはラテン語（Vulgata）と対比して見ると，それはまったく両者の飜譯に対する態度の差に由來していることが分る。たとえばペテロ後書 1 の10（邦譯：兄弟たちよ。それだから，ますます勵んで，あなたがたの受けた召しと選びとを，確かなものにしなさい。）を Luther は ,,Darumb lieben bruder, thut deste mehr vleyss, ewren beruff vnd erwelung fest zumachen" と譯しているが，Emserは〝聖ペテロは vest(=fest) でなく gewiss と言っており，それができるためにはよい行いによる（per bona opera=durch gutte werck）と表現しているのに，Luther はそれを筆にしなかった〟と注をつけている。ところで Emser 譯（Darumb lieben brüder / thut dester mehr vleyss

ewren beruff vnd erwelung **durch gute werck** gewiss tzu machen) はまったく Vulgata の ,,Quapropter, fratres, magis satagite ut **per bona opera** certam uestram uocationem et electionem" によるものであり，Luther はギリシァ語原文 σπουδάσατε βεβαίαν ὑμῶν τὴν κλῆσιν καὶ ἐκλογὴν ποιεῖσθαί によっているのである。

5

同じ Text の飜譯により言語のあらゆる面を嚴密に對照させ，1200年間に及ぶドイツ語の變遷を考察する具體的な資料として極度に聖書を利用したのは F. Tschirch である。彼は1955年に ,,1200 Jahre deutsche Sprache" を刊行したが，それには ,,Die Entfaltung der deutschen Sprachgestalt in ausgewählten Stücken der Bibelübersetzung vom Ausgang des 8. Jahrhunderts bis in die Gegenwart Ein Lese-und ein Arbeitsbuch" という副題がついており，資料と目的のもっとも簡單な素描が行われている。さらに詳しく自ら序で説明しているが，それによると，言語史を究めるために細かい音韻變化の考察と語形の體系的な排列で事足れりとした時代はすぎ去り，今やその基礎の上に立って，語彙・語構成・構文すなわち表現の全般に注目することが絶對に必要になった，從って一語一語の形式と意義の對照を正確に可能ならしめるものとしては古代から今に至るまでたえず民衆の言語に飜譯されて來た聖書をおいて適當な資料はないと判じたのである。

Lesebuch としての手ごろな大きさを考えればあらゆる箇所を比較するわけにはゆかないから，内容からいっても表現形式から見ても世界文学としての聖書の本質を示していると考えられる章句を新旧約の中から選擇し，ドイツ語史の区分に應じた譯を5～6種時代的に左右のページに排列し，Luther 以後の新約聖書の比較のためにギリシァ語原文の，また彼以前の譯の典據を明かにするためにラテン語譯 Vulgata の欄を設けた。選擇の箇所と利用した文献は次のとおりである。

I　ルカ傳1の1-80（受胎告知）

II　ルカ傳2の1-20（聖誕物語り）

III　ルカ傳15の11-32（放蕩息子の話）

IV　ヨハネ傳4の5-42（キリストとサマリヤの女）

以上にはギリシァ語（Gと略す），ラテン語（Vと略す）と並んでTatian（830年頃），Mentel（印刷は1466年だが言語の形は一世期半ほど古いと言われる。），Evangelienbuch（1343年），Luther（1522年の初版），Zinzendorf（1739年），Menge（1926）の6種が收められている。

V　マタイ傳13の44-52（天国のたとえ）

VI　マタイ傳22の1-22（王の婚宴と税問答）

VII　マタイ傳24の29-39（世の終りの預言）

ここではG, V, Tatianと並び，ついでMonseer Fragmente（800年頃，すなわち830年のTatianよりは古いが，飜譯のテクニックとしてはこれにまさり，ドイツ語本來の相を備えている），Mentel, Evangelienbuch, Luther, Mengeと配置されている。ただし，VIの13節後半から22節まではMonser-fragmentの代りに12世紀のWien-Münchner Fragmentが擧げられている。

VIII　パウロ書簡より　a）ロマ書1章　b）エペソ書1章

ここではG,V,の次に古代ドイツ語をとばしてMentel, Gotha-Salzburger Paulinen（15世紀），Luther, Zinzendorf（1739），Bahrdt（1777），Mengeと並んでいる。

IX　創世記より

a）1の1-31（天地創造物語り）

b）3の1-24（失樂園の物語り）

c）22の1-13（イサクの犠牲）

Vulgata, Mentelにつづいては14世紀のMünchener Handschriftがおかれ，それからLuther（1523），Mendelssohn（1783），Mengeの順となっている。

X　ダニエル書5の1-30（ベルシヤザル王の話）Vulgata, Mentel, Claus

Cranc (1350 年頃), Wormser Propheten (1527), Luther (1534), Menge の順にならぶ。

XI 詩篇より

a) 17篇: V, Nokter (1000年頃), Windberger Handschrift (12世紀), Schleizer Fragmente (12 世紀), Heinrich von Mügeln (1370 年頃), Luther (1523年と1545の両版), Menge.

b) 90篇: 上の Schleizer Fragmente に代って Mentel が挙げられている。

c) 125篇: 90篇の配置と異るのは Nokter の前に 820年頃の寫本 (Altalemannisch) があり, Luther 譯 1523年版一つとなっている點である。

なお Tschirch は欄外に同系統の印刷本における異點や同時代の譯で注意すべきものを指摘している。すなわち, Mentel の影響を受けた数種の印刷や Lutherに對抗して飜譯した Dietenberger や Emser は絶えず顧みられている。

これらの Text の對比によってどのように變遷のあとをたどるべきか, Tschirchは自ら序に ,,Beispiele" という頃を設けてかなり詳しく説明しているが, それはたしかに含蓄があり, われわれにも比較のヒントを与えるものである。たとえばダニエル書の 5 章 5 節は

Vulgata	digiti quasi	
Mentel	vinger als	einer hand des menschen
Claus Clanc	vingir als	einis menschen hant
Wormser Propheten	finger gleich als	eyner menschen hand
Luther	finger als	einer menschen hand
Menge	Finger	einer Menschenhand

となっているが, Tschirch は言う: "最古の飜譯 (筆者注ここではMentel 譯) はラテン語の語順に忠實に從っている。Claus Clanc は中世ドイツ語の動かぬ習慣により名詞の前に附加語の 2 格をおいている。これは今日では詩的な

古い表現と感じられ，日常語では特異に思う語順である。Wormser Propheten (1527) と Luther は，定着した語順で並ぶ数語が日常語でしばしば使われる結果，ついに一つの形式に結合しはじめた様を悟らせる。というのは不定冠詞はもはや Clanc のように Mensch にかからず，次の Hand にかかっているからである。それで2格 Menschen は両語にしっかりと包まれている。このよくおこる接合形式が一語にまとめて書かれるようになったのは相當後の時代であることを Menge の譯が示している。新しい語はこのように（合成語という形で）生じたのであり，新なる2格接合への可能性が得られたわけである。言語のこういう變遷を見て感ずるのは，ドイツ人が時のたつにつれ次第次第に感覺界におけるいろいろな知覺を高次の單位にまとめて見，言語の形式で再現する力を强めていったことである。

彼が言語の端的な生命は文に具現しているとし，ドイツ文の構造の発展をたどる例として引いているのはルカ傳1の22である。

Vulgata: et cognoverunt quod visionem vidisset in templo.

Mentel: Vnd sy derkanten daz/er hett gesechen eingesicht in templo.

Evangalienbuch: und sie bekanten daz / daz her ein gesichte gesehen hette in dem tempele.

Luther: vnd sie merkten/das er eyn gesicht gesehen hatte ym tempel.

Menge: da merkten sie/daß er eine Erscheinung im Tempel gesehen hatte.

ここではまず指示代名詞 das（主文の目的）が副文を導びく接續詞に發達した過程が明白に認められる。Evangelienbuch では "daz" が主文とそれに續く文で二重に使われているが，Luther ではもはや接續詞としての機能を確實に示している。しかもそれが正書法ではっきり区別されるようになったのがはるか後の時代であることは Menge 譯のうかがわしめるところであろう。Tschirch はなお細かい例を若干あげてこの書物の利用方法を説いている。ただし，この本の全體が一様に1200年にわたる變遷を示しているのでないことは

上に引いた内容の表を通覧しただけで明かである。すなわち，新旧譯の全體を通じてどの頚目にも現れているのは Vulgata, Mentel（マタイ傳中のわずか數節をかく），Luther, Menge であり，從って Spätmittelhochdeutsch—Frühneuhochdeutsch— 現代標準語の對比はかなり詳しく行うことができるが，ある部分では古代，あるいは中世の適當な例を欠き，きわめて近い時代の對比がとくに詳しくなされている。

はじめの4項目：Ⅰ ルカ傳1の1-80，Ⅱ 同2の1-20，Ⅲ 15の11-32，Ⅳ ヨハネ傳4の5-42では Tatian（830年頃）から Mentel（14世紀初め）へとんでいるが以下 Evangelienbuch（1343年），Luther（1522年），Zinzendorf（1739年，Menge（1926年）とほどよく200年ぐらいの間隔で配列されているから，單に Ahd.—Mhd.—Nhd. の推移といった大まかな素描よりは詳しい歴史的な考察を可能にしている。

問題はこの分量の中に綴りと音韻，文法，語彙の特徴がどれほど示されるかということであろう。次にそれを検討して見よう。

1. 綴りと音韻

現代ドイツ語の基本的な音韻を表わす綴りは全面的に Menge 譯に現われて居りそのほかの譯も，Ahd. の完全母音を反映した Tatian をはじめとして各時代の特徴を大體表わしていると言えるから，音變化の主要な點は Text によってたどれるはずである。ただし實際には Evangelienbuch（1343年）より古い言語を引刷したと言われる Mentel は新しい母音の體系を示す一方，Evangelienbuch は Mhd. の母音組織を保つ上に中部方言の特色を強く保っているので直線的な比較が困難である。Ahd.—Mhd.—Frühnhd—Nhd. という音の變化をはっきり示すなら Mentel を省き，Evangelienbuch における中部方言の要素を指摘する必要があろう。

Mhd.	ī	ū	ou	öu
Mentel	zeyte	haus	gelaubt	freude
Evangelienbuch	zcît	hūs	gloubit	vroude
Luther	zeyt	haus	geglawbt	freud

Evangelienbuch の gloubit の i は弱音 e に相当するもので，この Text にははなはだ多く見られる中部ドイツ方言の特色である。

engil＝Engel, irfullit＝erfüllet, mūtir＝Mutter

このような i は Luther においても1522年の聖書には散見する。

wilch＝welch, eynis＝eines, Gottis＝Gottes

しかし大ていは上例のように welch の e に代るものか，s に先行する弱母音の位置に現れるものと決まっていて，Evangelienbuch のように多くはない。

Luther の綴字と音韻については Umlaut 記号の欠如によって /u/ と /ü/, /o/と/ö/ が書き分けられていないことを除けば，動揺する綴字 (haus, hauß, haußs—wirt, wird, wirtt) から音韻の體系や音價の推側に役立つ材料を数多く提供して居り，これだけのスペースにほぼ基本的な結合形式が示されている。

2. 語　形

Deklination と Konjugation の體系の全貌を示すに足る語例はとうてい集められないが，その歴史的な變遷を大きく示した部分を具體的に示す材料はもとめられる。

たとえば名詞の変化において Ahd. Mhd. で弱語尾であったものが，Nhd. で消失したり，强語尾に転じた場合があるが，そのあとをたどるためには中間の時代をよく顧みる必要のあることが次の例からも察せられよう。

Tatian	(zi thiorun)	sîne iungôr**on**	(sˆnes) herzen
Mentel	(zů einer meide)	sein iunger**n**	irs hertzen
Evangelienb.	zu einer juncvrow**en**	sîne junger**n**	ires herzen
Luther	zu eyner iungfraw**en**	seyne iunger	yhrs hertzen
Zinzendorf	zu einer jungfer	seine jünger	ihres hertzen**s**
Menge	zu einer Jungfrau	seine Jünger	ihres Herzen**s**

また變化型の類推による統一の過程——またその語による時代差——, Mhd. まで3性を区別したという zwei の統一などもうかがうことができる。

Tatian	(mihhilu mahtig)	uueg (sibba)	zuuene suni
Mentel	(michele) ding	weg des frides	zwen sún
Evang.	grôze dinc	wec des vrides	zwêne sune
Luther	grosse ding	weg des fridens	zween sone
Zinzendorf	grosse ding	weg des fridens	zwey söhne
Menge	(Großes)	Weg des Heils	**zwei** Söhne

動詞の變化について見ると，强變化動詞の體系でも a) Ahd. から現在に至るまで音韻交替の型をほぼ忠實に保つものと b) 過去形単数複数の母音統一が Nhd. において行われたものを次の例がよく示している。

a)	Tatian	uuochs	gibar	batun	giengun
	Mentel	wûchs	gebar	bâten	giengen
	Evang.	wûchs	gebar	bâtin	giengen
	Luther	wuchs	gepar	baten	giengen
	Zinzendorf	wuchs	gebahr	baten	giengen
	Menge	wuchs	gebar	baten	gingen
b)	Tatian	screib	——	——	fundun
	Mentel	schraib	blaib	derschain	funden
	Evang.	screib	bleib	irschein	funden
	Luther	schreyb	bleyb	erscheyn	funden
	Zinzendorf	——	blieb	erschien	——
	Menge	schrieb	blieb	erschien	fanden

a) はAblaut-a 變化の動詞が古代から今まで變らぬことを示している。bâtin の i は中部方言を反映したものであり，Luther の gepar の p は Stammの b の無聲化を現わす。uo—u—u, ie—i は Monophthongierung が次第に正書法に現われた例である。

b) は Ahd. (および Mhd.) で Ablaut i—ei—ei—i の動詞が Luther においてもその型を保っていることを表わし，i—a—u—u の動詞も同様であることが察せられる。なお ei はおそくとも14世紀には /ai/ となっていることが綴りから分る。

c)	Tatian	(ar)riof	**habeta**	
	Mentel	rief	hett	**antwort**
	Evang.	**rufte**	hatte	**antworte**
	Luther	rief	hatte	**antwort**, antwortet
	Zinzendorf	**rufte**	hatte	antwortete
	Menge	rief	hatte	antwortete

ここでは hatte のように今不規則といわれる動詞が本來の弱變化型から轉じた過程，antworten のように語幹に -t をもつ動詞に弱變化語尾が定着した模様 (Luther では動揺している)[注7]，あるいは强變化，あるいは弱變化に屬したものが一つの型に決定した様子が示されている。

3. 文章論上の問題

接續詞の發達による文構造の拡大（副文の成立），語順の確立は古代から現代に至る大きな變遷であり，Tschirch も自ら例示したことを上に述べた。

助動詞の發達による時称體制の精密化はゲルマン語全體の歴史を通じて見られるところであるが，未來の表現について言えば單なる現在時称の轉用から助動詞 sollen の使用，ついで werden の定着の過程が次のようにうかがわれる。

Mentel	wann	du	**geest** vor dem antlútz des herren
Evang.	wan	du	**salt** vore **gen** vor dem antlitze des herren
Luther		du	**wirst** fur dem herrn her **gehen**
Zinzendorf	denn	du	**wirst** vor der person des HErrn her**gehen**
Menge	denn	du	**wirst** vor dem Herrn einher**gehen**

時称の精密化はそれ自體助動詞を必要とする受動の場合にもはっきり現れる。

Tatian	inti	funtan	uuard
Mentel	vnd	ist	funden
Evang.	und	ist	funden
Luther	vnd	**ist**	funden **worden**
Zinzendorf	und	**ist**	gefunden **worden**

Menge	und	**ist**	wiedergefunden **worden**

上の文はまた過去分詞 ge- の定着化をも示す例として役立つ。

2格の用法の制限や否定語法の整備も文章論上の大きな變化であるが，その両者を一文で説明することができる。

Tatian	inti	sînes	rîhhes nist enti.
Mentel	vnd	seins	reichs wirt nit ende.
Evang.	und	s´nes	r.ches inwirt nicht ende.
Luther	vnnd	seynes	konigreychs wirt keyn ende seyn.
Zinzendorf	und	seines	königreichs wird kein ende sein.
Menge	und	sein	Königtum wird kein Ende sein.

すなわち現在では見られなくなった2格の Gliederungsverschiebung は9世紀から18世紀にかけての文語に保たれているが，否定の方は本來の文章（動詞）否定の十分な働きは Ahd. においてのみ認められ，Mhd. にようやくその機能を受けついだ nicht は Ende に関しての部分否定をも行い，ついでそれが kein において明白になった模様が看取されるのである。なお上には Mhd. の弱い重複否定（in＝en＋nicht）も認められる。

古代から中世に至るまで非常に多くの用例があり，Luther 以後きわめて減少したものは，現在分詞の用法である。それは同時にギリシァ語・ラテン語の語法の影響からの脱却であり，この點に關しては口語の自然な用法の導入である。

Tatian	menig' himilisches heres got **lobôntiu** inti **quedentiu**
Mentel	ein menig der ritterschaft des himmlischen heres: **lobent** gott und **sagent**
Evang.	eine menige himelischer ritterscaft, got **lobinde** und **sprechinde**
Luther	die menge der hymlischen heerscharen, die lobeten Gott vnd sprachen
Zinzendorf	eine menge der himmlischen heere, die Gott lobten, und sprachen

Menge　　eine Menge himmlischer Heerscharen, die Gott lobten mit den Worten

時代が新しくなるに従って用法のせばまった接續法の用法については，これを十分に示す材料があると言えない。(注8)

4. 語の構成，意義の變遷など

合成語成立の一つの型を Tschirch は自ら例示したが，派生による語の構成を明かにできる例は十分にない。これに対して一つ一つの語についてはその時代の世界像を反映していると認められる場合があり，意義の變遷を明白に示す好例もある。上例の Mentel および Evangelien において〝天の軍勢〟を表わす語に ,,Ritterschaft" がそえられたのはたしかに中世的な表現である。

語義について言えば，Hunger が個人の空腹状態を表わすことにおいては古代から現代に至るまで變りないが Tatian から Mentel, Evangelienbuch までは〝飢饉〟の意味を含んでいたことが認められる。これは Luther, Zinzendorf では Teuerung になり，Menge では今日のドイツ語で普通に使われる Hungersnot となっている。このような例は一々あげるときりがないであろう。

さて本書は V—XI では均等に1200年の變遷を示す例文をそろえていないが，どの部分においても Mentel—Luther—Menge を支柱としているから，少くとも中世後期から現代に至る語法の變遷について I—IV で認めらる資料を倍加することができる。また各部分において配置された Text から時代の接した言語についてとくに詳しく比較することも可能である。

またどの Text からも歴史的な研究をたすける材料が見出されるという點では Götze や Eis の編集した本と同様であり，,,1200 Jahre deutsche Sprache" という標題は必ずしも適當ではないにせよ，言語の全面にわたって通時的に比較するための ,,Lese-und Arbeitsbuch" としては十分價値あるものと言わなければならない。(注9)

6

以上において論じて來たことは，要するに限られた資料の對比により，言語の構造とその歴史的變化の諸相がどの程度具體的に把握できるかという問題であった。すなわち，Stroh のようにわずか主の祈りの一行の對比をもってしてもゲルマン諸語の親近關係の考察といった問題に役立つことを察した。一方 Götze, Eis, Tschirch のように十分の意図をもって編集された書物は問題とする言語の基本的な特徴をかなり詳く示し，個々の問題には多くの興味ある材料を呈供しているが，それらによってある Text の歴史的・地理的な位置づけを具體的に知り問題性をわきまえた上，それ自體の言語を研究することを不必要にしていないのである。たとえば Götze, Eis においても引用され，さらに Tschirch においては主要な Text の一つである Septemberbibel (Luther譯初版）も，それだけの材料から音韻・文法の基本的な型をうかがうことができるが，なお今日から見れば特異とすべき語法が多くもれている。すなわち，重複否定，除外文，接續法の廣範囲な用法がそれである。現在分詞についてもギリシァ・ラテン語法のなぞりを脱している點は十分うかがえるけれども Septemberbibel 自體における獨自の用法となると殘念ながら引用の箇所には認められない。逆にこの文献全體を通じて記述できるところは言語の構造の全面に及び，ドイツ語史上において占める位置のゆえに持つところの問題性はきわめて多い。綴り一つをとって見ても，音韻體系の時代と地域の特徴の反映を知り得るばかりでなく，全體に數多く散見する外來固有名詞の表記から外國語およびドイツ語の音價推側に相當な手掛りを與えている。語形ではその時代の特徴を示す例があるばかりでなく，Deklination と Konjugation の變化表をほぼうめつくすことができる。文章論でもあらゆる分野の問題があり，これをどのような原則のもとに記述すべきかが焦點となろう。語構成についてもかなり詳しく扱えるはずである。語彙では外來語の問題，意義の變遷の問題，現代語に對する影響など論ずべき點が多い。歴史的な文献としては，Vorlage の問題，Sachsen 官廳語との關係，Handschrift との關係も探究すべき課題であり，40

年近い文筆の活動を示した Luther の言語の中でどんな位置を占めるものか——とくに自ら訂正補筆した聖書の後の版との比較，現代において一般信徒が Luther 譯として用いている版との異同，共通ドイツ語普及との關係等々何れをとって見てもそれ自體が一つの研究テーマとなりうるものである。上にあげた諸學者の文献のことごとくがこのように問題性を持つものとは言えないが，時代や地域の特色を明白に示し言語構造の多方面にわたる記述ができる Text であるならば——またその資料の入手が可能であるならば——，Lesebuch に引用された Sprachprobe の瞥見だけで終ることなく，一度は Text 全體の飜讀の結果にもとずく考察をまとめる必要があろう。たとえそれがすでに先人の試みた Text であるにせよ，現在の言語研究の段階に應じて再檢討さるべきものが多々あると思われるからである。

（注）

（1） なおオランダの學者 J. Heemstra の Deutsche Grammatik für Niederländer bearbeitet（刊行年不詳，1935年前後？S. 186）に der lnhalt folgend**es** Paragraph**en**, das Vergelten empfangen**es** Gut**en** という場合には强語尾が自然であると述べているが，今日では必ずしも自然であると言えなくなっている。形容詞の强語尾保持の必要を Blatz は强くうったえているが（Blatz: Neuhochdeutsche Grammatik, Bd 1 S.362-369, Karlsruhe 1895[3]），それにもかかわらず現代語の變化體系に止り得なくなったことを上掲の Erben らの書物ではっきり示しているのである。筆者自身も1955年に刊行した文法書には問題の强語尾をのせていたが，その後改訂にあたってこれをのぞいた。

（2） Th. Frings: Grundlegung einer Geschichte der deutschen Sprache（Halle, 1957[3]）の序。なお問題の地図は同書に添えられたもので60枚目にある。

（3） これは現在 Heidelberg 大学の少壯教授 P. v. Polenz が筆者に直接に語ったところである。ただし彼の師 L. E. Schmitt 教授は Marburg の Deutscher Sprachatlasの所長としてその門下生がドイツ語のほかに少くとも一つのゲルマン語に通曉することを强くすすめている。

（4） ここにあげたゲルマン諸語の例は1930年に英國聖書が刊行した Gospel in many tongues（そこには630飜譯例がある。）に收められている。なお Iddisch 譯もあり，基本的な型としてはドイツ語（の變種）であることが分るが，ヘブル文字で記されているため印刷の都合を慮り引用しなかった。フリジァ語に關しては

Angelsächsisch との親近性を十分示しているとは言えないが，最近入手した聖書（Amsterdam-Hearegrêft, 1947）のヨブ記を飜讀していたとき，接續詞，前置詞にもそれがうかがえることを知った。Iyk as＝like as, foar de saek fan＝for the sake of

（5） なぜここに Luther をひきあいに出したかと言えば，Frühneuhochdeutsch の文献としては量的に彼の著作をしのぐものはなく，共通文語の發達に對する影響の點ではもっとも比重が大きいからである。またその時代は Frühneuhochdeutsch の期間をどうとるにせよ——1350～1650年（W. Scherer），1450～1650（S. Feist），1400～1600（G. Eis）——その眞中となるからである。Frühneuhochdeutsch を Mhd. から Nhd. に至る過渡期と見ることに疑いをいだく A. Schirokauer は〝L.E. Schmitt は Paul の Mhd. Grammatik の15版で Frühnhd. は 1500年を中心とした前後300年と見なしているが，300年という期間は Ahd. Mhd. の各々に匹敵する長さである。これを過渡期と呼ぶいわれはない〟とし自ら ,,Es ist eine souveräne Sprachepoche.…Der Zeitraum ist erfüllt vom wirtschaftlichen Aufschwung, der kulturellen Usurpation und endlichen politischen Resignation der Städte.“ と述べている。〔Arno Schirokauer: Frühneuhochochdeutsch (S. 1016) in., Deutsche Philogie im Aufriss,” hsg. v. W. Stammler, Berlin, 1952〕

（6） このマルコ傳の箇所はギリシア原文・ラテン語譯でも〝sein＋現在分詞〟に當る形式で表現されている．

（7） 過去形弱語尾の －te における弱母音は Luther においてもしばしば脱落するので，aotwort という形は er antwortet か antwortete か文脈によってのみしか判断できないことが多い。

（8） ことに四福音書に散見する間接話法が十分現れていない。それに意味對意味の對比が容易なのに比べて，六つの聖書を通じて語と語との厳密な對比が，（從って文と文との對比も）案外できない箇所がある。またある語法がこの時代に存在したという解釋は常にできるのに對し，それがまだ現れなかったことを確めるためには材料が足りないと考えられる場合がある。

（9） たとえば Menge が ,,als Mann und Weib schuf er sie“ と譯している所（創世記1の27）において，Luther は vnd er schuff sie eyn menlin vnd **frewlin**（＝Nhd. Fräulein），Mendelssohn（1783）は Mansen und **Weibsen** erschuf er sie. と飜譯しているが，ここに語義の變遷，縮少派生辭の歴史的考察の好例が見出される。

（10） Götze, Eis, Tschirch のように Lesebuch として編集したのではないが，A. Berger が Deutsche Literatur in Entwicklungsreihen の Reihe Reformation 第7巻として刊行した ,,Deutsche Kunstprosa der Lutherzeit“（Leipzig, 1942）に

は Erasmus, J. Mathesius, Spangenberg, J. Sleidanus, S. Franck, A. Hondorff 等16世紀の Schriftsteller の散文が收められており，本文の冒頭には September-bibel と14. 15世紀の飜譯が10ページにわたって對照されている。なお本書に光彩を與えるものは序の二論文（Die Entwicklung deutscher Prosakunst im Werdegang der neuhochdeutshen Schriftsprache と Auswirkungen des Luthergeistes im neuzeitlichen deutschen Schriftum）であって，ことに前者はドイツ共通語の成立に關する Frings, L.E. Schmitt, Schwarz らの30年代業績を正しく顧みた文献としてドイツ語の歴史的研究に志すものの必讀の書と認められる。

(11) 問題の Septemberbibel も J. Luther が 1871年に Sprache Luthers in der Septemberbibel を刊行してからやがて一世紀になんなんとしている。もとより Luther の言語研究はその後いろいろ顧みられてはきているが Franke の大著（Grundzüge der Schriftsprache Luthers, Hall 1913～1922 3Bd.）も分日では絶版であり，また内容上今日の研究段階から見て記述しなおすべき点が多い。J.Erben は Syntax の上でこれを試みようとしたが，その材料としたのは An den christlichen Adel deutscher Nation (1520)であった。(Grundzüge einer Syntax der Sprache Luthers, Berlin 1954)